

徳川家康公 と駿府

Tokugawa Ieyasu in Sumpu

静岡産業大学情報学部 特任教授

中村羊一郎氏

Yoichiro Nakamura



経歴

1943年(昭和18年)静岡市生まれ。東京教育大学文学部卒。静岡県史編さん室長、静岡市立商業高校長、静岡産業大学教授を経て2010年現職。おもな著書に「番茶と日本人」など。近年はミャンマーの茶文化研究に力を入れている。

庶民社会に溶け込んだ神としての家康

家康の鷹狩り好きは半端ではなかった。鷹狩りは庶民の生活空間で行われる。これが庶民と親しく接したという家康伝説を生み出す背景となった。

あるとき、鷹狩りに行く途中、横田町で早朝から掃除をしている老人を見かけた。大いに感心した家康は老人に茶を所望した。老人が洪茶を献じると家康はすこぶる上機嫌で、「褒美をやるう、何が望みか」と言った。老人は、「家の前を往来する車が多く、埃がたつうえにうるさくて迷惑しているので、やめさせてほしい」と申し上げた。そこで家康はこの町での車の通行を禁じた。家康は馬場町に住む的場源七と親しかった。鷹狩りに行った帰りに的場家に寄ると

き、暗くなついてもすぐわかるように、同家には、一般に認められない破風を設けることを許したほどだった。広野の三浦家を訪れたときには、出された料理がおいしかったので味知(あじ)という別称を与え、庭の柿に接ぎ木をしていったという。好々爺然とした家康のふくよかな顔が浮かんできそうだ。

しかし、大好きな鷹狩りを阻害するようなことは断じて許さなかった。慶長十六年(一六二二)の十二月一日、府中近辺に鷹狩りに行ったところ、田に水がいっぱい溜まっていた。これでは自由に動き回れない。毎年、稲刈りが済んだら水を落として置くようにという命令が出されていたにもかかわらず、それを守っていないと怒った家康は、田の持ち



ていると推定されています。